



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	三友盛行著, 『マイペース酪農-風上に生かされた適正規模の実現-』, 農文協, 2000年, 226頁
Author(s)	吉野, 宣彦
Citation	北海道農業経済研究, 10(1), 56-59
Issue Date	2001-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63463
Type	journal article
File Information	KJ00006912147.pdf



しやすくなり売り手過多・貸し手過多のもとで交換耕作自体が変質することはありうるのか、2つには、著者も指摘しているがコントラクタなど農作業受委託事業の展開により、交換耕作をどのように組み込みつつ、一括利用という仕組みのなかに包摂され、土作りが図られていくのかどうかである。たとえば、鹿追農協による作業受託組織のように牧草収穫作業を中心とした酪農部門のコントラクタ展開であっても、交換耕作がそのもとでどのように組み込まれるかである。3つには、緑肥鋤き込み・休閑など地力増進に対する支援措置や自主的選択が従来の交換耕作形成にどのように影響していくのか。とくに、こうした助成策により、必ずしも交換耕作という相互調整の途を選択しなくとも、連作障害を回避し土作りが自己完結型経営のなかにビルトインできる可能性もある。また、今日では周辺に滞留しはじめた農地を、安く一時的に賃貸するなり作業受委託するなりして交換耕作に代替し、それを利用しつつ計画的に過作・偏作を修正する、あるいは輪作体系の修正を図る途もありうる。

北海道においては、規模拡大においても同様であるが、農家も行政とともに所有権中心主義に傾きすぎているきらいがある。それと平行して、土地利用中心の農家相互調整装置を走らせることがきわめて肝要であり、連作障害回避としての交換耕作も、賃貸借や作業受委託の展開など同様に、土地利用をいっそう充実させる内部装置なのである。

この交換耕作は、交換分合など所有権に立脚した集団化という財産権に抵触する、きわめて作動の困難な途を取って模索しなくとも、交換耕作による「土地利用の相互調整」・「土地の集团的・計画的利用」という方式によって目的を達成することも可能なものであり、大いに評価できるのではあるまいか。その意味でも、本書は時宜を得たものであり、多くの方々による利活用を大いに期待するものである。

三友盛行著

『マイペース酪農－風土に生かされた適正規模の実現－』

農文協 2000 年226 頁
酪農学園大学 吉野 宣彦

I. 新しい時代の批判的酪農論

一農業者の手による本書が学会誌で評されるには理由がある。まず目次が「経営編」「技術編」「暮らし編」で構成されているように、久しく世に示されなかったトータルな経営論を展開していること。また「21世紀は『農業の時代』」で書き始められているように、環境問題に対応した新しい経営像を提示していること。さらに三友農場の経営的成果をもたらした技術、行動、思考を実践に基づいて示しているだけではなく、「マイペース酪農をめざす農民」たちとの、過去10年にわたる学習活動の経験を糧に書かれていることである。新しい時代に即応した酪農をトータルな視点で、「上からの指導」や「農政側の思考法に支配」されない「農民自身の言葉で語」という、意欲に満ちあふれたこの作品は、農業者への啓蒙書に止まることなく、多部門の研究者への問題提起を意図した挑発の書となっている。まず著者独特の思考や選び抜かれた言葉に理解を深めたい。

II. 量より質重視の経営管理論

第1部「経営編」では、まず三友農場は、1頭当たり乳量は少なく生産規模は小さいが、購入飼料の給与量が少なく、低コストなため所得が高いことをもとに、多くの酪農家は「頭数も乳量も多すぎ」、「『拡大』よりも『習熟』」を重視すべきと主張している。その後紹介される経営管理の手法は、コストをどう低減するかというテーマに貫かれている。

第1に、経営分析に関して、多くの酪農家が「負債が多いから経営が悪く赤字になる」と考え、

コストの低減をあきらめていることから、簡易な分析手法を示す。北海道に一般的なクミカンを利用して、支払利子を経営費に算入しないなどのオリジナルな収益率「B式」である。この収益率が低い理由は「生乳を生産する構造にあって、その結果として負債の増加」となる。

第2に、労務管理に関して、「土・草・牛・人の健全な働きがあって初めて乳となる」とし、これらの「働き」を「フルに生かす」「促農家」というオリジナルな言葉を「篤農家」と対峙させることにより、労賃を無視した過度な勤勉さに警鐘を鳴らしている。

第3に、経営要素の保有調達に関しては、「欲しいもの」と「必要なもの」とを区分する判断力の重要さを強調している。特に「牛を減らせないのは…経営に対して消極的だから」「何となく増えてしまったというのが大多数」として、残さない牛から生まれたメスは初生時に「処理料という追い金を打っても整理」すべきと厳しい態度を求めている。

第4に、単年度の営農計画に関して、今の作業をもとに来年を決定する随時即決によって「計画と実績がきちっと合う」としている。「草を刈ったときに施肥の効果がわかり、来年の施肥量が決まり」、「搾乳する人が種付けと乳量を確認」し、収穫された「草の量と質によって、来年の配合飼料の量、代金もすぐに出」という。

Ⅲ．経営成果を裏づけてきた技術論

第2部「技術編」では、三友農場の経営成果を可能にした技術の根幹にある技術観に始まる。

第1に、技術評価に、生産性というフローではなく、土作りというストック概念を加えることを、「農地は貯金でいえば元金で」「それ自体が減らないように、むしろ増やす仕組みが豊かな農場の基本」と明快に主張している。

第2に、堆肥づくりは、「トータルバランスの

カナメ」として、飼養管理、飼料生産、牛舎施設など諸部面と密接に絡み合っていると主張している。「良いエサとは」「よい堆肥の素となる…繊維質の多いエサ」であり、「よい堆肥のできないような軟便は、実は牛にとってもつらく、刈遅れの乾草は「敷きわらになり牛床は乾燥し…よい堆肥の原料とな」り、「スタンション方式…の利点はバーンクリーナーで糞尿が管理できる」となる。

第3に、生乳生産について、「配合飼料は…栄養の不足分を多少補う範囲」に止め、「十分な粗飼料が反芻動物の生理を健康にしてくれ、その結果、量と質にふさわしい乳が生産され」とし、「時代に求められる良質乳は」、脂肪率や無脂固形分、生菌数、体細胞数などの数値とは「別のところにある」と主張する。

第4に、飼料生産について、「30年間草地更新なしの私の草地」では「第1に考えることは土の健康で、草の多収を優先しない」とし、「草地の更新は『地力収奪効率化作業』」であり「草地酪農は、耕種農業とは全く異なった形態の農業だ」という認識」を求めている。

この技術観の次には、低コストを支えてきた技術の奥義がていねいに紹介されていく。

第1に、「コスト低減の決め手となる放牧は、春の放牧が一日早くできるか、秋を一日引き延ばせるかが…大きく左右」し、「集約放牧、粗放放牧…など形式は…地域、個別の条件にあった方式を取り入れる」べきで、「大切なものは、牛の観察と行動を理解し…対応すること」にあるとする。例えば「馴らし放牧」をすると「牛は次の青草をもらうまで空腹でもじっと我慢し…空腹のまま放牧」し、胃の中のPHが急激に変化して「危険」。放牧の「初日は午前中まで舎飼で乾草を腹一杯食べさせ、午後に放牧し、夕方の搾乳以降は一気に昼夜放牧に切り替えて」いるなどである。

第2に、平均産次数5産の健康な牛づくりを、生育ステージに沿って紹介している。仔牛は敷き

料を取り替えやすい「底は土で天井のない単なる囲い」のペンに入れるが、ここは親牛の牛舎と屋根続きのD型にあり、悪天候でも「飼い主がゆっくりと観察しながら作業ができる」。哺乳は「丈夫で発達した第1胃を作るため」「35～45日を目安に…切り上げ」、「吸い口のついた哺乳バケツで」「人が近づいたときの仔牛の動き、吸い付き方、飲んで様子から、仔牛の健康状態を観察…し、下痢になる前に治す」。「牛は…下を向いて食べるのが自然な姿勢」とし、「乾草は…地表面のやや高いところにお」き、離乳後は「人が牛舎へ行くたびに、乾草をひっくり返して、いつでも葉の多い新鮮な部分が食べられるようにしてや」と細部の注意を怠らない。また「青草は…繊維質に乏しく…丈夫で大きな胃をつくるのに適」さないため、「生まれたその年には放牧をし」ない。

このあと第3に、乾草のみの牧草収穫について、第4に、搾乳牛の飼料給与について、いずれも一見おおざっぱだが、実は基本的で緻密な技術が示されていく。ただし、これらの条件には、「経営編」から各所で指摘している「適正規模」がある。

IV. 家族経営における「適正規模論」

「適正規模」は、第3部の「暮らし編」に総括され、しかも「暮らし」は「酪農を営み、その営みを含めて暮らし」と包括的になっているため、企業の経営論より広い概念となるが、以下の3つの側面で示されている。

第1に生産面では、「基本として草地面積を中心とし」「根釧では1ha当たり、成牛換算1頭」とする。これは「化成肥料、過度な草地更新によらない草の収量で見合う頭数」であり、「ふん尿の量と散布…上必要な面積」であり「昼夜放牧ができ」る面積となる。放牧の結果「重装備のトラクターや作業機がいらす」「貯蔵飼料が半分ですみ、ふん尿処理作業も半分で、一年間の労働時間が大幅に激減」する。

第2に生活面では、「一家団らんの食事のためには…女性は遅出、早上がり…を実現できる頭数規模」としている。「適正規模を超えた拡大は、…自分自身の、あるいは家族に対する確固たる生き方、方針がいつまでたっても確立できないためにずるずると流れに乗っ」た「男性の思考法」とし、同じ立場に立つ「同労者」としての女性の「助言に」耳を傾けるべきことが強調されている。

第3に社会的な側面から、「より少ない生産量で一家族を養うことができるのならば、それはなにより効率のよい酪農」で、「大きな一戸より、5戸が生きられるほうが」「5倍の家族となり、生徒数も5倍となり」「車も5台、家も5戸」と「地域の活性化になる」ことを強調する。

この「適正規模」は、経営者が「作業を全部手がけ、経営全体を見」ることで可能になり、「基本的には家族農業が一番望ましい形態だ」という前提が附されている。

V. 論点

さいごに、本書のアンカーとなる「政策論」に関わって、酪農問題に関わる研究者にとっての課題を付け加えたい。

第1に、政策の評価について、基本問題調査会の答申を「マイペース酪農のめざす21世紀の姿を、酪農以外の方々が示してくれ」とし、新しい基本法を「価値の見直し」と評価し、「農水省…の中には、…適正規模に関心を示し、…政策の一部とし」た前進面を強調している。しかし、新しい基本法の強調する「効率的・安定的な農業経営」は、著者の主張するストック概念の技術評価にはない。例えば2000年4月に示された酪肉近代化の基本方針では、「『土、草、牛』という生産要素のバランスの取れた酪農経営」を謳ってはいるが、一頭当たり乳量の増大を基本とした。政策での技術評価の基本がまだフローの生産性概念に止まっていることは、技術の評価方法について研究

レベルでの不十分さを示しているだろう。

第2に、本書の表題にある「マイペース酪農」という言葉がなお深められるべき含蓄の深さを持っていることを、あらためて考えさせられる。「マイペース型」という表現が随所に見られることは、営農類型であることを示している。また「酪農の学習会が、人々の生き方、人生観の話にまで発展し」「実は酪農は生き方の表現だと多くの人が気づき」との表現はライフスタイルであることを示している。さらに「マイペース酪農がめざしてきた」という表現は、運動の主体を示している。本書のキーワードは、多面的にとらえられている。近代化の代表とされる酪農経営の担い手は、生身の人間として家族と地域に深く関係しながら生活している。その多面性を総合的に関連づけて捉える態度が強く求められている。

第3に、政策は変わったが「変わらないのは農家だけ」という表現は、謙虚に過ぎるだろう。この間に「マイペース酪農交流会」などが各地に作られ、多くの農業者が影響を受け、また技術的にはマイペースな方法論にある多数の農業者との繋がりが作られてきた。この農業者の広範な実践があったからこそ、「マイペース酪農」を政策担当者が評価しえた。実践に基づいて政策を実現する政策立案のスタイルとして、「マイペース酪農」の運動的側面を、十分に評価する必要があるだろう。

本書では、根釧においてながく追求されてきた「マイペース酪農」を、経営論、技術論、生活論から捉え直すと共に、環境や食糧問題に即応した新しい酪農として「三友モデル」を提示した。しかも、「B式」「促農家」「同労者」「習熟」「農業的効率」「暮らし」「営農」…など含蓄の深い農民の言葉により発信した。技術研究分野だけでなく、農業経済の広範な分野に問題を提起している。よりトータルな研究の必要性和緊急性を投げかけている本書は、研究者にとって必読の書であることが確信される。

木村保茂著

『現代日本の建設労働問題』

学文社 1997年 437頁

弘前大学農学生命科学部 泉谷 眞実

I

本書は、現代日本の建設労働に関わる諸問題を、詳細な実態調査データにもとづいて分析を行ったものである。

筆者は、建設業を「鉄鋼業をはじめとする基幹産業の大量消費部門の一つとして、基幹産業資本を直接的に媒介すると同時に、・・・社会的間接資本を整備して、他の資本の拡張に間接的に寄与するという、産業循環上の重要な役割を果たしている」ものとして位置づける。そして、これまでの建設労働研究は「基幹産業の研究に比べて脚光をあびることが少なく、周辺的な位置づけをされてきた」。また、建設労働に関する実証的研究は「かつては農漁村出稼の側面からなされることが多」かったが、それだけでは「現局面における建設労働問題をより深く追求することは不可能である」としている。

そして、本書の課題を、「労働市場論的視点」と「労働過程・生産点に立脚した合理化分析視点」から、「現局面の建設労働の諸問題・特質を別出し、併せて、それらを産業社会内に正しく位置づけ」、それによって建設労働問題を日本の労働問題の中に「正當に位置づける」こと、と述べている。

II

本書は、3部からなり、序章と終章を除く9章から構成される。本書を各章ごとに紹介する紙面はないため、各部ごとに内容を簡単に紹介していきたい。

第1部では、1984年から87年に実施された北海道・札幌市の地下鉄シールド工事調査をもとにして、現段階における建設業の合理化の実態を、